

十一～十三世紀における法相宗の漢音

佐々木 勇

目次

- 一、問題の所在
- 二、問題解決の方法
 - 1 対象資料
 - 2 方法
- 三、分析結果
 - 1 音形・清濁
 - 2 声調
- 四、対象資料の漢音の拠り所
 - a 『廣韻』声調・声母の清濁との対応関係
 - b 上声全濁字の去声化の比率
- 五、対象資料の漢音の拠り所
 - 1 漢音加点のはじまりの時期
 - 2 加点のはじめの漢音の拠り所
- 五、上声全濁字の去声化の比率が高い理由
- 六、むすび

一、問題の所在

残存する古訓点資料の加点点例によって、仏書の字音読の概要はすでに明らかである。

仏書の字音読は、多く呉音でなされる。しかし、その中であつて漢音読されるものもある。『仏母大孔雀明王経』『理趣経』などの密教経典、また、『南海寄帰内法伝』『大慈恩寺三藏法師伝』『大唐西域記』『高僧伝』などの伝・記系統のものである。この中には南都古宗で加点点された資料も含まれている。⁽¹⁾

南都古宗の僧が漢音をも用いたことは、残存資料によつて知られる。しかし、その漢音の実態は、充分解明されていないとはいえない。よつて、その実態の調査をおこなう必要がある。本稿は、現存する古訓点資料によつてその実態を知ろうとするものである。

二、問題解決の方法

1 対象資料

本稿では、南都古宗加点点資料の代表として、残存数の比較的多い法相宗加点点資料をとりあげ、検討することとする。

問題解決のためには、初期の漢音加点点資料がまず必要である。残存状況ならびに音の実態から、十世紀以前と十一世紀以後とで分けて考えることが有効である。

a 十世紀以前

現在のところ、九世紀以前に加点点されたことが確実な漢音加点点資料は見つかっていない。これは、法相宗加点点資料に限らず、日本漢音加点点資料全体についていえることである。⁽²⁾

現存する漢音資料のなかで、法相宗の僧の加点点であるとされる最古の資料は、保阪本『蒙求』の天曆(九四七—九五七

年)頃点である。⁽³⁾また、法相宗の僧の加点点であることが確実な資料の最古のものは、醍醐寺本『妙法蓮華経釈文』一〇〇四年頃書写移点である。⁽⁴⁾

この二資料以外のものは知られていない。この二資料は、法相宗加点点資料として貴重であるばかりでなく、初期の漢音資料として重要なものであり、諸先学の研究によってその音の実態はかなり明らかになっている。⁽⁵⁾

b 十一世紀以降

十一世紀以降になると、残存資料の数は増加する。

本稿では、原本あるいは複製本・写真で調査できたものの中で、分析に耐えうる数の音注を有するものとして、次の諸資料の実態を報告したい。⁽⁶⁾十三世紀以前の加点点資料に限ったのは、それ以降の文献には筆者の調査が及んでいないためである。

ア興福寺蔵『大慈恩寺三藏法師伝』A種点 一〇七一年頃点⁽⁷⁾

イ興福寺蔵『大慈恩寺三藏法師伝』C種点 一〇九九年点(巻第七について調査)

ウ興福寺蔵『高僧伝巻第十三』一一〇〇年点⁽⁸⁾

エ興福寺蔵『大慈恩寺三藏法師伝』E種点 一一一六年点

オ大東急記念文庫蔵『辨正論』巻第二 一一二三年点

カ築島裕蔵『辨正論』巻第三 一一二三年点⁽⁹⁾

キ国立国会図書館蔵『大慈恩寺三藏法師伝』巻第三 一一二六年点

ク京都大学人文科学研究所松本文庫蔵『大慈恩寺三藏法師伝』巻六〜十 一一二〇年朱点

ケ京都大学人文科学研究所松本文庫蔵『大唐西域記』一一二三年点(巻第十二について調査)

2 方法

十一〜十三世紀における法相宗の漢音

音形・清濁と声調とを、中国中古音の体系（『廣韻』に依る）と比較してみる。

三、分析結果

1 音形・清濁

対象資料の音形は、『蒙求』『仏母大孔雀明王經』などの漢音資料と体系的に一致する。いわゆる新漢音形は見られない。しかし、いずれも、漢籍などくらべて、呉音形を多く混入している⁽¹⁰⁾。

実例をウ興福寺蔵『高僧伝巻第十三』一一〇〇年点から、一部引用する（〈〉内は所在行数）。

明母…〔靡〕流〔平〕靡〔平濁〕〈四〇八〉〔閔〕閔〔上濁〕魯国〈五五四〉

微母…〔望〕秦〔平〕望〔平濁〕〈二〇二〉〔武〕武〔上濁〕〈五六二〉

日母…〔人〕人〔平濁〕力〈二四〉〔児〕児〔平濁〕〈五五一〉

泥母…〔内〕内〔去濁〕殿〈四七七〉〔奴〕一奴〔平濁〕〈五七二〉

娘母…〔濃〕濃〔平〕淡〔平濁〕〈二三七〉

これらは、呉音ではマ・ナ行音のものである。ただし、次のように呉音形と判断される例も混入している。

娘母…〔擎〕大〔去濁〕擎〔上〕〈三三六〉

また、全濁字（漢音でいわゆる清音）に濁声点が加えられることも極めて少ない。本資料では、全濁字への声点加点点例二四一例中三例にすぎない。これは、次濁声母の疑・日・泥・娘・明・微母の非撥音韻尾字（漢音でいわゆる濁音）への声点加点点例八六例に、濁声点一七例が見られるのと対照的である。

エ以下の諸資料でも、ほぼこれと同様の実態である。

これらの点は、すでに築島裕が『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』において指摘している

ことと等しい。他の諸資料も興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』と根本的な相違はないのである。

2 声調

a 『廣韻』声調・声母の清濁との対応関係

このアゝケまでの諸点を、『廣韻』の体系と比較すると、それぞれ後掲の表アゝ表ケのようになる(梵語音訳字への加點は除外した)。これらは、すべて六声体系で加點されている。この六声体系が日本漢音の中心的声調体系であることは、広く知られている。資料アゝケも日本漢音の六声体系と中国中古音の声調清濁の対応の原則(左表)に基本的には一致している。

中古音の四声	中古音の清濁	日本漢音の六声体系の声調
平声	清・次清 濁・次濁	平声輕 平声(重)
上声	清・次清・次濁	上声 上声・去声
去声	清・次清・濁・次濁	去声
入声	清・次清・次濁 濁	入声輕 入声(重)

ただし、この原則に一致しない点も見られる。その大きな相違点は、声調ごとに以下の点である。

- 1 『廣韻』平声清・次清字が平声輕とならずに平声となるものが相当数見られる。これは、時代が降るとともに顯著となる。

- 2 『廣韻』上声字に平声の加點をした例が比較的多く見られる。

3 『廣韻』去声字に平声の加点をした例が比較的多く見られる。

4 『廣韻』入声字の軽重の別が不分明である。資料ア、エは入声濁字も入声軽となる例が多い。また、資料オ以下は、全体的に区別が曖昧になっている。

原則とのこれらのずれは、漢籍訓点資料にも見られるものである。⁽¹²⁾しかし、本稿の対象資料の方が、ずれの幅が大きい。その原因としてまず考えられるのは、呉音声調の混入であろう。また、中国中古音の声調と日本漢音の声調とのずれも考慮しなければならない。さらに、日本漢音の独自の變化という視点も忘れてはならない。⁽¹³⁾

ずれの原因の究明には、まず、対象とした資料の声調から呉音声調を区別することが必要である。しかし、一一の漢字の呉音声調が必ずしも明らかでないのが現状であり、本稿の対象資料には仮名音注が無い例の方が多いこともあり、これ以上の分析はできない。⁽¹⁴⁾

b 上声全濁字の去声化の比率

右の原則に外れるものではないが、上声全濁字に去声の加点例が多いことを指摘しなければならない。

沼本克明は『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第二部第五章「漢音の複層性に就て」のなかで、「法相宗読誦經典」として本稿でも対象にした『大慈恩寺三蔵法師伝』の興福寺本A種点・同C種点・国会図書館本一一二六年点をとりあげ、「上声を保つ比率と去声へ移行した比率のほぼ半々のもの」の中に所属させている。沼本は、これらの資料が呉音を交えているために「多少割り引いて考える必要がある」としている。たしかに、呉音の声調に一致するものもある。しかし、対象資料中最古の興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』A種点を例にとると、上声全濁字「土」は、五例の加点例のすべてが去声に加点され(呉音声調平声)、同じく「上」も三例の加点例のすべてが去声に加点されていて(呉音声調平声)、去声化した例が優勢であることは動かない。この点は、他の資料でも同様である。

本稿の九点の調査結果から、十一〜十三世紀の法相宗漢音では上声全濁字が去声化した例の方が多いことが判明した。

四、対象資料の漢音の拠り所

沼本は、先引の論文で、日本漢音は上声全濁字の去声化の比率の異なりから見て、層的に伝承されていることを指摘している。この説によれば、対象資料の漢音は新層の漢音ということになる。しかし、ただちにそう結論づけることは疑問が残る。音が日本に伝わってからの変化も考えられるからである。その可能性を探るために、以下の考察を行ないたい。

1 漢音加点のはじまりの時期

はじめにも述べたとおり、南都古宗の寺院で加点されたもので、平安初期の漢音加点資料は現存しない。

たとえば、『大慈恩寺三蔵法師伝』とほぼ等しい本文を持つ『大唐三蔵玄奘法師表啓』平安初期点の音注は、呉音の加⁽¹⁵⁾点である。また、興聖禪寺蔵『大唐西域記』巻第一平安初期角筆点にわずかながら見られる字音注も、呉音の加⁽¹⁶⁾点である。

ところが、平安中期になると南都の漢音加点資料が見られるようになる。先引の興聖禪寺蔵『大唐西域記』巻十二平安中期の朱点・墨点は、漢音の加⁽¹⁷⁾点となっている。また、聖語蔵『辯中邊論』天曆八年(九五四)点は、極めて少ない音注例しかもたないが、漢音の注のようである。⁽¹⁸⁾

築島裕は、『国語の歴史』第二章「漢音と呉音」の中で、伝記類の南都古宗の加⁽¹⁷⁾点に漢音が見られることについて、次のように述べている。

平安初期には、この種の文も、多分、他の經典の類と同じように呉音でよんだものかと思われる。それが平安中期以降、伝記や地誌の類などを始として、四六駢儷体などは多く漢音でよまれるようになり、その影響によってこれらの書物も漢音に変ったが、なお古来の慣習の影響で、一部の語には呉音が残っていたのではあるまいか。

『高僧伝』は、梁の慧皎(四九七―五五四)の作であり、『辨正論』は、唐の法琳(五七二―六四〇)の撰述である。『大

『唐西域記』は六四八年、『大慈恩寺三藏法師伝』は六八八年に撰述されたものであり、奈良時代には日本にすでに伝えられていたのであるが、当初は呉音でよまれたのであろう。しかし、十世紀以降の訓点資料に残る音は、唐(六一八—九〇七)末長安音を反映するとされる日本漢音の体系と一致するのである。

よって、本稿の対象文献である『大唐西域記』『大慈恩寺三藏法師伝』などの漢音の加点のはじまりは、十世紀であると考えられる。

2 加点のはじめの漢音の拠り所

次に、十世紀の加点当時の漢音とは、中国の当時の音か、日本で行なわれていた漢音かが問題となる。

どちらの可能性も考えられるが、後者の可能性が高いであろう。なぜならば、現存資料を見る限りでは、呉音の混入が比較的多いからである。当時の中国音を聞いて加点したならば、呉音がまぎれこむ余地は少なかったであろう。前項で見たように、呉音で読まれていたものが日本に伝わっていた漢音に取り替えられたと考えるのが穏当ではなからうか。遣唐使が廃止された後でもあり、僧たちが直接生の中国音を聞く機会は多くなかったであろう。

これが認められたとして、さらに具体的に、日本に伝わっていたどの音に依ったのかを考えてみたい。これには、a 法相宗の漢音、b 真言宗・天台宗の漢音の二つが考えられると思う。それぞれ検討する。

a 法相宗の漢音

法相宗では、十世紀にはすでに漢音の加点を行っており、その残存資料もある。

『蒙求』天曆頃点・醍醐寺本『妙法蓮華経积文』の声調体系については、すでに調査がある。⁽¹⁹⁾『蒙求』天曆頃点の上声全濁字への声点加点例は、上声・五七例、去声・五一例である。この資料では、上声を保つ比率と去声へ移行した比率は、半々といえる。醍醐寺本『妙法蓮華経积文』は、移点の際の誤点があると考えられているが、⁽²⁰⁾ 祖点では、上声全濁字が上声軽にとどまる比率は『蒙求』天曆点と同程度であったのかもしれない。

十一世紀以降の資料については、すでに見たとおりである。

加点のはじめが法相宗の漢音であったとすると、法相宗の漢音の声調が、上声全濁字が上声を保つ比率と去声へ移行した比率のほぼ半々のものから、去声へ移行する比率の高いものへ変化したことになる。

この現象の類例として、『蒙求』における指摘を挙げることができる。『蒙求』の天曆頃点は、上声全濁字に対する上声点・去声点の比率がほぼ等しいが、「長承三年点・建保本・康永本の三本が天曆点とは別の去声化の比率の高い声調体系を有する同系統の漢音であったのではないか」というものである。⁽²¹⁾

b 真言宗・天台宗の漢音

法相宗は、十世紀から真言宗の影響をうけていた。⁽²²⁾『興福寺別当次第』には、定昭大僧都(九一一—九八三)が天禄(九七〇—九七三)年間に真言宗東寺の長者を兼ねたことが記されている。定昭は、金剛峰寺座主をもつとめ、興福寺に一乘院を創設した僧である。また、真興(九三四—一〇〇四)は、東密の一流である小島流を開いている。今回取りあげた『辨正論』一一二三年点に加点している覚印も、真言宗の僧でもあった。⁽²³⁾そして、十一世紀になると、法相宗所用の喜多院点⁽²⁴⁾が真言宗でも使われるようになる。⁽²⁴⁾

一方、天台宗と法相宗とは、宗教的には対立していたが、漢字音の注音法については影響関係が指摘されている。⁽²⁵⁾また、本稿の対象文献『大唐西域記』『大慈恩寺三藏法師伝』は、法相宗ばかりでなく真言宗・天台宗でも読まれている。⁽²⁶⁾十世紀に加点し始められた漢音は、法相僧が真言・天台僧から学んだものであることも十分考えられる。

こう考えた場合、法相宗の僧は、中算『妙法蓮華経釈文』のような優れた辞書を持ちながら、本稿対象資料の字音加點の際には参照していなかったことになる。もつとも、『妙法蓮華経釈文』の場合は、日本漢字音を知るためには不便な辞書であったと考えられる。『妙法蓮華経釈文』の反切は、すべて中国中古音の体系を反映しているため、⁽²⁷⁾そのままでは用いることができない。⁽²⁸⁾また、加点された声点も、日本漢音として一般的な六声体系とは異なっていた。さらに、「単字

一千五百七十字」という掲出字数は、他の文献に注をつけるには少なすぎるといふ基本的な欠点がある。

右に検討したとおり、a 法相宗の漢音、b 真言宗・天台宗の漢音のどちらの可能性も考えられる。あるいは、十世紀に加点し始められた漢音は法相宗に伝えられたものであったが、現存の資料に見られる状態に至る変化の要因として真言・天台の漢音の影響があったということかも知れない。

五、上声全濁字の去声化の比率が高い理由

問題を、上声全濁字の去声化の比率にもどす。

対象資料に見られた法相宗の漢音は、上声全濁字の去声化の比率が高いものであった。その理由として、次の二つが前節と平行して考えられるであろう。

a 去声化の比率が半々のものから高いものに変化した。

法相宗加点資料の訓読法については、他の訓点資料の訓読と比較して、その保守性がこれまで強調されている⁽²⁹⁾。しかし、近年、月本雅幸が十二世紀の仏書訓点資料の特質の一つとして、「前代の訓法を墨守したのではなく、それをふまへながらも、学僧の独創性を発揮」したものであることを挙げ、加えて、『西域記』などの史伝や儀軌は内容の理解が第一の目的であり、宗派・流派の中だけで訓みを傳承していくものではなかったことを述べている⁽³⁰⁾。本稿の対象資料にも、同一字にいくつもの訓を加点した例が存し、訓を増補改訂していった跡が見られる。

なお、訓点資料では音韻変化が如実に反映されるのであり、訓法とは別に検討しなければならない⁽³¹⁾。

十世紀なかばから十一世紀後半までの資料が無いために、その間の事情を知ることができない。しかし、残存する十一〜十三世紀の資料を通覧すると、前代のを正確に傳承したとは考えにくい。対象とした資料の中で、同一文献への時代を隔てての加点を見ると、異なる点が多いからである。

『大慈恩寺三蔵法師伝』の興福寺本一〇七一年点と京都大学人文科学研究所本一二二三年点とともに声点加点がみられる語を、序の部分から順に抜き出して一例を示す。

興・真^{セム}全^上 権^去旨^上 英^{チイ}平^平懸^去聖^去 邃^{スイ}去^去旨^上沖^去宗^上 先^平懸^昆昆^平 千^平懸^去懸^入

京・真^平懸^去全^平 権^{クエン}去^去旨^上 英^平懸^去聖^去 邃^去去^去旨^去沖^去宗^平 先^平昆^平懸^去 千^平懸^去懸^入

以下も同様であつて、異なるものが多い。漢字の声調は、現在のわれわれにもそうであるように、日本の僧にとって習得が難しく、正確な伝承が困難であつたことが推測される。⁽³²⁾

b 去声化の比率が高い真言宗・天台宗の漢音を学習し加点した結果である。

本稿の対象資料の上声全濁字の去声化の実態は、沼本の調査に依る真言宗読誦経典の中の『文鏡秘府論』・天台宗読誦経典・紀伝系漢籍の実態に近いものである。前節で検討したとおり、伝来の新しい真言宗・天台宗の漢音を学んで加点した可能性も考えられる。

この場合も確定はできない。前節と同様、aの要因としてbがはたらいた可能性もある。

六、むすび

以上、十一〜十三世紀における法相宗の漢音について、対象資料の実態報告を主目的として述べてきた。その結果、次の点が判明した。

- 1 十一〜十三世紀の法相宗の漢音は、日本漢音の一般的な体系の内に入るものである。
- 2 『廣韻』上声全濁字は、大部分が去声となつている。
- 3 この点は、十世紀の法相宗の漢音とは異なつている。

2、3の原因については明らかでない。しかし、真言宗・天台宗に伝わった新しい層の漢音に全面的に依拠していると考えざるほかに、伝承のうちに變化したということもあり得るのではないかと考えた。

漢籍の声調については、時代が降るとともに『廣韻』とずれる例が多くなることが指摘されている。⁽³³⁾ 今後、日本漢音の古層をなすとされる『仏母大孔雀明王経』、中層をなすとされる明経道、新層をなすとされる真言宗(文鏡秘府論)・天台宗・紀伝道、それぞれの加點資料の年代別の調査をすすめる必要がある。それによつて、日本漢音の内部での變化があるのかどうか、あるとしたらそれはどのようなものなのかを明らかにして行かねばならない。

注

- (1) 築島裕『国語の歴史』(東京大学出版会。一九七七年)第二章 漢音と吳音、参照。
- (2) 同右、沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版。一九八六年)一三〇頁、参照。
- (3) 築島裕『長承本蒙求』(汲古書院。一九九〇年)「研究」参照。
- (4) 馬淵和夫『醍醐寺三宝院藏『法華経釈文』の字音について』(『国語と国文学』第四十九卷五号)による。
- (5) 小松英雄『日本声調史論考』(風間書房。一九七一年)、馬淵和夫『醍醐寺三宝院藏『法華経釈文』の字音について』(『国語と国文学』第四十九卷五号)、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院。一九八二年)、築島裕『長承本蒙求』など参照。
- (6) そのほか、管見の範囲で、法隆寺藏『辨正論』巻第一(一一二三年点、五島美術館藏『破邪論』(一一二三年点、法隆寺藏『大慈恩寺三藏法師伝』巻第一・七・九(一一二六年点)、法隆寺藏『大唐西域記』巻第一・三〇十一(一一二六年点)、神田喜一郎藏『大唐西域記』巻第二(一一二六年点)、法隆寺藏『南海寄帰内法伝』巻一〇巻四(一一二八年点)、法隆寺藏『弥勒上生経疏』巻上(院政末期朱点)、法隆寺藏『大唐大慈恩寺大師碑文并面讚』(鎌倉中期点)がある。
- (7) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』による。イ同C種点・エ同E種点も同じ。
- (8) 小林芳規先生よりお借りした写真版・移点資料による。
- (9) 『古典研究会創立二十五周年記念 国書漢籍論集』(汲古書院。一九九一年)所収写真版による。
- (10) 築島も興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』古点が、『仏母大孔雀明王経』「蒙求」『文鏡秘府論』などとくらべて吳音読の混入が多いことを指摘している(『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 研究篇』一五二頁)。

(11) 注(2) 沼本著書五一〜五三頁、参照。

(12) 柏谷嘉弘「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』第六一集。一九六五年) 参照。

(13) 佐々木勇「日本漢音に於ける声調変化——岩崎本『蒙求』を中心に——」(『新大國語』第一四号。一九八八年) 参照。

(14) 時代が降る資料ほどそのずれが大きくなるようであり、日本漢音の国語化の問題につながるものと思われる。また、資料ケにいたると平声軽が少数となる。これも和語における平声軽の消滅と関係があるうと思われる。今後の課題としたい。

(15) 本資料の加點者は、東大寺の僧で法相学に関係の深い人であったかと推定されている(築島裕「知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓古点」(『訓点語と訓点資料』第四輯。一九五五年五月)。

(16) 小林芳規「角筆文獻の国語学的研究 研究篇」(汲古書院。一九八七年) 三八〇頁。この資料も南都の僧の加點と推測されている(同上書、三九三頁)。

(17) 吉田金彦「訓点拾遺五題」(『訓点語と訓点資料』第十一輯)、曾田文雄(同第十一輯。第十四輯) 参照。

(18) 築島裕「聖語藏辯中邊論天曆点」(『訓点語と訓点資料』第一輯) 参照。なお、石山寺藏「辯中邊論」平安極初期点は、淳祐またはその弟子によって加點されたと推測されており、音注は吳音のようである(大坪併治「改訂 訓点語の研究 下」参照)。

(19) 佐々木勇「長承本『蒙求』平安中期点の声調体系」(『国語学』第一六八集、注(5) 沼本著書第二部第四章第四節、参照。注(19) 沼本論文。

(20) 沼本克明「読誦漢音に於ける学習音の介入」(『鎌倉時代語研究』第十輯)。

(21) 『日本仏教宗史論集第二卷 南都六宗』(吉川弘文館。一九八四年) 参照。

(22) 築島裕「上野図書館藏大慈恩寺三藏法師傳卷第三古点」(『東京大学教養学部人文科学科 人文科学科紀要』第十六輯。一九五八年) 参照。

(23) 築島裕「平安時代語新論」(東京大学出版会。一九六九年) 六八頁、参照。

(24) 「〇六」で音注を示す方法について、築島裕「興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 研究篇」二五三〜二五五頁の指摘がある。また、△の声点について、佐々木勇「声点「△」の機能——『辨正論』保安四年点について——」(『かがみ』第三十一号。一九九四年三月) で指摘した。

(25) 注(7) 築島著書七頁、三三・三三三頁、築島「叡山文庫藏息心抄について」(『人文科学科紀要』(東大教養学部) 第三十輯) 参照。『大唐西域記』には、石山寺藏長寛点(ヲウト点は三論宗点・醍醐寺三宝院藏建保二年点(同じく三論宗点) がある。

『大慈恩寺三藏法師伝』にも円堂点を用いた天理図書館藏本があり、三論宗点本が存したことも予想されている。

- (27) 高松政雄「法華釈文反切考」(訓点語と訓点資料)第五十五輯)。
- (28) 沼本克明「古辞書音義の音注と漢音」(築島裕博士還暦記念国語学論集)所収) 参照。
- (29) 古代の助詞「イ」の残存・形式名詞「モノ」の残存・訓点への万葉仮名の使用・「及」字の不読などである(築島裕「自證房寛印の訓点について」和漢比較文学叢書2『上代文学と漢文学』(汲古書院。一九八六年)所収、小林芳規「漢訳仏典の日本受容」岩波講座『日本文学と仏教 第六卷』(岩波書店。一九九四年)所収、参照)。また、勝山幸人は、「法相宗の古点本とその言語(下)——興福寺における師説伝承の意識——」(『野州国文学』第三十五集。一九八五年三月。)のなかで、「師説伝習を中心とする学問それ自体の共通性を含む法相宗の訓読活動は、漢文訓読史全体からみれば一種特殊な存在である」と述べている。
- (30) 「十二世紀の仏書訓点資料の特質——従来の研究の問題点と今後の課題——」(松村明先生喜寿記念会編『国語研究』(明治書院。一九九三年)所収)、「大唐西域記の古訓法について」(『国語と国文学』五七卷一二号。一九八〇年十二月)参照。
- (31) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会。一九六七年)二九〇頁、参照。
- (32) 注(21)沼本論文。
- (33) 注(12)柏谷論文。
- (付記) 本稿は、平成六年度鎌倉時代語研究会夏期研究会での発表をもとに執筆したものである。発表の席上、小林芳規・沼本克明両先生よりご教示いただいた。これによつて後半部分を大幅に改稿した。また、資料の閲覧について大東急記念文庫・五島美術館・国立国会図書館・京都大学人文科学研究所の皆様にご高配を頂いた。興福寺・築島裕先生には貴重な資料を活用させていただいた。記して感謝の意を表する次第である。なお、本稿は、平成六年度文部省科学研究費奨励研究Aによる成果の一部である。

表ア 興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』A種点 1071年頃点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	20 (24)	9 (9)	49 (73)	40 (61)	5 (7)	1 (1)	4 (4)	4 (4)	5 (6)	3 (3)	3 (3)	4 (5)	1 (1)			1 (1)
平輕	81 (121)	15 (24)	9 (10)	4 (4)	1 (1)		1 (2)		3 (6)	1 (2)						
上	7 (7)	2 (2)	8 (9)	9 (9)	32 (49)	7 (7)	7 (9)	21 (30)	4 (5)			5 (5)				
去	18 (22)	1 (1)	6 (6)	5 (5)	9 (12)	1 (2)	15 (24)	2 (2)	41 (61)	7 (8)	23 (30)	27 (46)				
入輕				1 (1)									26 (36)	2 (2)	21 (25)	9 (13)
入												1 (1)	13 (13)	1 (1)	14 (19)	3 (3)

注) 上段の数字は異なり字数、下段の()内の数字は例数を示す。空欄は、用例が無いことを示す。以下の表も同様。

表イ 興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』C種点 1099年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	67 (69)	17 (25)	84 (148)	64 (124)	13 (15)	1 (1)	10 (11)	8 (9)	16 (17)	4 (4)	9 (11)	12 (13)			1 (1)	
平輕	80 (144)	16 (31)	12 (15)	2 (2)		2 (2)	4 (4)		5 (5)		1 (1)	1 (1)				
上	11 (12)		7 (7)	12 (14)	46 (72)	12 (15)	4 (5)	26 (44)	7 (9)	2 (2)	3 (3)	9 (9)		1 (1)	2 (2)	
去	19 (20)	1 (1)	18 (21)	12 (17)	13 (15)	6 (6)	23 (44)	5 (7)	61 (116)	19 (32)	27 (43)	42 (77)		1 (1)		
入輕					1 (1)								47 (69)	12 (16)	24 (26)	24 (32)
入													13 (16)	3 (5)	19 (30)	7 (9)

表ウ 興福寺蔵『高僧伝』卷第十三 1100年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	45 (61)	17 (17)	59 (90)	66 (114)	11 (14)	8 (13)	3 (3)	8 (9)	17 (19)	8 (9)	4 (4)	5 (7)				
平輕	76 (131)	14 (24)	11 (15)	3 (3)	11 (12)	1 (1)	2 (2)		3 (3)				1 (1)			
上	6 (6)	3 (3)	7 (8)	1 (1)	27 (33)	5 (9)	4 (4)	16 (22)	2 (2)	3 (3)		7 (11)				
去	18 (21)	3 (3)	11 (16)	9 (10)	8 (11)	4 (4)	15 (21)	3 (3)	44 (69)	8 (9)	15 (17)	20 (31)			1 (1)	
入輕	2 (2)								1 (1)				43 (54)	15 (18)	26 (33)	15 (23)
入	1 (1)		1 (1)						1 (1)				10 (10)	2 (9)	20 (26)	4 (5)

鎌倉時代語研究

表工 興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』E種点 1116年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	39 (41)	9 (9)	58 (71)	40 (48)	8 (9)	1 (1)	5 (5)	4 (5)	9 (9)	3 (3)	12 (12)	17 (17)	1 (1)		1 (1)	
平輕	72 (85)	14 (16)	17 (21)	6 (7)	7 (7)	3 (3)	1 (1)	2 (2)	7 (7)	1 (1)	3 (3)	1 (1)				
上	7 (7)	1 (1)		5 (5)	33 (38)	5 (5)	6 (6)	20 (22)	5 (5)	2 (3)	3 (3)	7 (7)		1 (1)		
去	20 (21)	1 (1)	21 (28)	9 (10)	9 (9)	3 (3)	18 (23)	6 (6)	44 (54)	14 (15)	32 (43)	25 (33)	3 (3)			
入輕		2 (2)			2 (2)	1 (1)	2 (2)	2 (2)					30 (31)	5 (5)	14 (14)	14 (17)
入													5 (5)	2 (2)	6 (6)	1 (1)

表才 大東急記念文庫蔵『辨正論』巻第二 1123年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	59 (81)	16 (18)	71 (115)	59 (115)	6 (8)	4 (4)	4 (5)	3 (6)	10 (11)	4 (4)	4 (5)	8 (9)	1 (1)			1 (1)
平輕	58 (109)	13 (30)	8 (8)	2 (2)	2 (2)	1 (1)			2 (2)		1 (1)					
上	16 (16)	2 (2)	3 (3)	4 (4)	30 (52)	5 (8)	3 (4)	18 (31)	2 (2)			2 (2)				
去	9 (10)	1 (1)	8 (8)	5 (5)	14 (15)		24 (57)	3 (3)	42 (74)	6 (24)	18 (25)	25 (41)				
入輕													26 (33)	9 (9)	19 (22)	16 (19)
入													16 (17)	4 (6)	16 (23)	8 (10)

十一く十三世紀における法相宗の漢音

表力 築島裕蔵『辨正論』巻第三 1123年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	89 (123)	19 (22)	97 (204)	101 (294)	17 (21)	8 (9)	5 (5)	11 (13)	17 (21)	3 (3)	9 (10)	18 (18)			2 (2)	
平輕	132 (310)	28 (64)	36 (53)	18 (23)	10 (11)	1 (1)	6 (7)	1 (1)	10 (12)	2 (2)	1 (1)	4 (5)	1 (1)			
上	16 (28)	1 (1)	8 (11)	8 (9)	67 (143)	16 (26)	8 (14)	40 (94)	10 (16)	6 (8)	7 (8)	8 (14)				
去	21 (33)	9 (9)	12 (14)	6 (8)	16 (20)	4 (4)	36 (87)	7 (7)	91 (219)	20 (50)	40 (78)	43 (100)	1 (1)	1 (1)		
入輕													43 (56)	14 (22)	22 (26)	31 (51)
入													16 (50)	14 (22)	23 (32)	15 (21)

三三三

表キ 国会図書館蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』巻第三 1126 年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	7 (7)	1 (1)	9 (9)	6 (6)		1 (1)	2 (2)		1 (1)	2 (2)	1 (1)					
平 輕	12 (14)	2 (2)	5 (5)	1 (1)												
上	2 (3)				3 (3)		3 (3)	2 (2)	1 (1)		1 (1)					1 (1)
去	5 (5)		2 (2)		2 (2)	1 (1)	3 (3)		8 (9)		2 (2)	2 (2)				1 (1)
入 輕													4 (4)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
入													4 (4)	2 (2)	4 (4)	2 (2)

鎌倉時代語研究

表ク 京都大学人文科学研究所蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』1210 年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	23 (24)	4 (4)	40 (46)	49 (124)	3 (3)		2 (2)	2 (2)	4 (4)	3 (3)	4 (4)	10 (15)			1 (1)	
平 輕	27 (28)	2 (4)	2 (2)	4 (4)	2 (2)				1 (1)							
上	3 (3)	1 (1)	7 (7)	7 (7)	18 (20)	1 (1)	3 (3)	32 (53)	3 (3)	1 (1)	2 (2)	7 (11)				1 (1)
去	7 (7)	2 (2)	9 (9)	7 (10)	5 (5)	4 (7)	8 (9)	6 (7)	26 (26)	5 (6)	18 (18)	19 (48)				
入 輕													5 (6)	1 (1)	3 (3)	5 (5)
入													8 (8)	1 (1)	10 (11)	9 (11)

三三四

表ケ 京都大学人文科学研究所蔵『大唐西域記』1223年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	80 (122)	32 (51)	69 (128)	70 (139)	11 (11)	5 (5)	18 (20)	9 (12)	27 (30)	3 (3)	13 (16)	15 (17)			1 (1)	2 (2)
平輕	44 (69)	11 (15)	10 (12)	2 (3)	2 (2)		4 (4)		2 (2)		1 (1)				1 (1)	
上	11 (13)	1 (1)	7 (7)	6 (6)	36 (59)	11 (17)	5 (5)	37 (53)	8 (10)	1 (1)	2 (3)	5 (7)				2 (2)
去	14 (16)	2 (2)	11 (14)	7 (7)	13 (19)	4 (5)	17 (25)	6 (6)	67 (122)	11 (20)	25 (48)	30 (55)			1 (1)	
入輕	1 (1)												30 (40)	10 (10)	16 (29)	17 (23)
入	1 (1)			1 (1)							1 (1)		25 (31)	6 (9)	25 (43)	11 (14)

十一く十三世紀における法相宗の漢音